

記念展に寄せて **陝北の守護神・抓髻娃娃ってどこから来たの？**

韓菊香さんと侯雪昭さん

田井光枝

‘わんりい’の活動開始翌年の1993年、丁度日本に版画の研修で来日し、町田で滞在中のまだ、30代半ばの周路¹⁾さんと知り合った。周さんが我が家に遊びに来るようになり、‘わんりい’²⁾のメンバー達との交流が始まった。メンバーたちは周さんが沢山の版画作品を携えて来日していることを知り、自分たちも見たいと、早速、周路個展を開催する話がまとまった。小田急線町田駅近くにできたばかりの全労済・ぶらぼう館が小さな展示スペースを開放していることを知って、交渉し、周路個展を実現させた。

下方に掲載の画像は、ぶらぼう館がニュースとして用意した当時のハガキだが、ハガキに掲載された画像を見て欲しい。展示作品は50×40cmサイズ程の20何枚だったと思うが、いかにもシルクスクリーンらしい鮮やかな彩りで、大半は私たちが見たことがない、髪の毛を結んだ子ども(?)がモチーフの作品が並んだ。‘わんりい’のHPのトップページにも、両手に大きな鳥を掲げた周路さん作品の、真っ赤な子供が貼り付けられて‘わんりい’のシンボルになっている。

作品中の子どもは怖いようでもあり可愛らしくもあって、私たちの表情にどう受け止めてよいかみたいな迷いが浮かんでいるのを受け止めたようで、周路さんが、「この子たちはね、ジュワジーワーワといって、すごい力を持っているんだ」と説明した。

ジュワジーワーワは漢字で表記すれば「抓髻娃娃」で、中国語を少しでも齧れば、「娃娃」は子どもを指すので髻を付けた子どもくらいの意味だと知ると思う。初めて陝北を訪れた時、沢山

の剪纸作品のテーマが正にこの抓髻娃娃だった。千差万別、さまざまな抓髻娃娃が剪られていた。

髻といっても普通にイメージする髻をつけているとは限らない。髻が鶏であったり大きな蓮の花であったりはよいが、体中に魚をはり付けていたり、蓮花の上にどかんと腰を据えたり、虎にまたがって仏具ともいえないようなものを振り上げていたりしている。周路さんが言うように、抓髻娃娃は陝北地方の、すべての人々をすべての厄から守る護神なのだ。

陝北を紹介した周路さんの著書を私のつたない訳で‘わんりい’に掲載したことがあるが、医者が手近にいない黄土高原で、命の最後の頼りとして、急ぎ抓髻娃娃を剪り、それを燃やした灰にお湯を注いで飲ませるといふ情景があった。21世紀初頭、中国を震撼させたサーズの折も陝北の農家では抓髻娃娃を入り口に貼ったそうだ。

抓髻娃娃は女の子がよく剪られている。次ページに掲載の侯雪昭さんの作品のように女性自身が灰めかされていたり、中には男の子もいて、さりげなく腹の下に男性のシンボルが下がっていたりという作品もある。貧しく常に生命の存続を脅かされてきた陝北での子子孫孫に命を繋げてゆく切実な祈りの声を聞くようだ。また、発音の語呂合わせによる目出度い図柄、鶏jī=吉jí 魚yú=余yú 蝠fú=福fúなどを体中とところ構わず貼り付けた抓髻娃娃や、蓮花は女性、魚は男性で、掲載の韓菊香さんの作品(右)のような抓髻娃娃も見られる。

この抓髻娃娃は一体いつ黄土高原で生まれてそれほどまでの力を持つものになったのだろう。20年前、一緒に陝北の剪纸展を開催した会メンバーの岩田温子さんと抓髻娃娃の不思議な存在を語り合った。今回またしても同じ思いに駆られている。しかしこの春、陝北を訪れ何人かの剪纸作家の女性たちにとって作品を見せて貰ったが、若手作家の作品には抓髻娃娃はなかった。陝北での生活が変わりつつある今、抓髻娃娃は既にその役割を終えたのであろうか。

BRAYON NEWS
おぼろ館は「BRAYON」を冠して、おぼろ館ホームページです。
金銭換 ぶらぼう館の イベントご案内

●ぶらぼう美術館 ●入場無料
3月4日木～9日火
メイビ式あみもの展
～展示と即売会～
オリジナルの1本の針と2本の糸で織り出すメイビ式あみものは、織物の歴史を今に繋いでくれる貴重なものです。様々な織り方も、織り手によって異なります。ぜひおぼろ館のメイビ式あみもの展にお越しください。

3月11日木～23日火
周路 絵画展
現在、日本に留学研修中の中国・安徽省出身の画家、周路(シュルー)さんの展覧と即売会を開催します。
周さんは、中国美術家協会の会員で、中国の全国美術展に入選するなど、若手ながら、幅広い活躍をしています。
繊細な感性と、従前の色豊かな絵画に磨きかけた作品をお楽しみください。
(後援 朝日文化センター)

「あなたも即売会を開いてみませんか。」
即売会や賞品、抽選、手作り作品などの展示をしてみたい方に、ぶらぼう館の展示スペースをお貸しします。貸出日など詳細についてはお問い合わせください。



‘わんりい’ HPのシンボル

陝北の剪紙といえば高鳳蓮さんで代表されると思われがちだが、5月開催の「果てしなく広がる黄色い大地の華 陝北剪紙」展では、高鳳蓮さんばかりでなく、同時代に活躍した陝西省洛川県の韓菊香さんや、もう少し世代が下の安塞県の侯雪昭さんの作品が沢山展示される。

韓菊香さんは高鳳蓮さんより10歳近く高齢の、大柄な方で接していると人間的な温かさが自然に伝わって来るようだった。高鳳蓮さんは異能の人らしく誰も真似できない意表を突く作品が多く、魅力的だが、韓菊香さんの作品は高鳳蓮さんとは全く反対に、昔ながらの剪紙のテーマを豪快闊達な作風で堂々と剪っていた。秧歌(豊年踊り)や日常生活などいろいろなテーマでの剪紙作品も多いが中でも抓髻娃娃や虎が好きなのようだ。来場くださった方はきっとユーマラスな虎の姿に笑いがこみ上げてくるに違いない。又、堂々とした力強い抓髻娃娃に惹きつけられると思う。韓菊香さんの大らかな抓髻娃娃には良いことを招き寄せてくれそうな何かがあるのだ。誰が見ても分かりやすく、母親の温かな愛情を感じさせる作品は、剪紙コンクールでも高く評価され、高鳳蓮さんに次ぐ2等賞を得ている。

そしてもう一人、安塞県の侯雪昭さんの作品も説明しがたい魅力がある。1954年生まれとのこと



侯雪昭さん(右から3番目)家族と一緒に。侯雪昭個人美術館にて(2018年2月)

で、私たちが初めてお会いした1997年はまだ40代だった。子どもの頃から絵が上手で器用な女の子として知られていたそう。料理上手で美味しい陝北料理でお昼をご馳走になり、剪紙を剪る様子など披露くださった。

侯雪昭さんは韓菊香さんや高

鳳蓮さんと世代が異なる若い新進の剪紙作家として、新しいものを作り出そうと現在も意欲的に取り組んでいる。大きな団花(円形の剪紙)作品や生命崇拜・子孫繁栄の隠喩を折り込んだ作品は侯雪昭さん独特の味わいがあり、作品の美しさも他の追従を許さない。2010年には陝西省非物質文化遺産剪紙技能一等賞を受けられたとのことだ。

韓菊香さん、そして高鳳蓮さんはすでに故人なられたが、今年春の陝北で、侯雪昭さん家族にお会いでき昔を語り合えたのは何よりの旅の収穫だった。

■注

- 1) 周路: 版画家、写真家。安徽省財形大学元教授。当時は、安徽省群衆美術大学学芸員だった。
- 2) わんりい: 当時は「つるかわ中国文化研究サークル」と称していた。

「果てしなく続く黄色い大地の華 陝北剪紙(切り紙)」展期間中の催しはどなたでも参加できます。5月14日のオープニングパーティでは、中国笙と二胡による中国民族音楽演奏の他、中国の楽しい小物を賞品にしたビンゴを楽しめます。どうぞお誘い合わせてお出かけください。(詳細: 24P)



↑ 2点とも韓菊香さんの抓髻娃娃作品



↑ 陝北女性による抓髻娃娃作品



↑ 4点とも侯雪昭さんの抓髻娃娃作品